様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ６ 月 １６ 日現在

機関番号：１３３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０７６６

研究課題名（和文）現代都市下層社会の歴史的研究 - 高度経済成長期の大阪「釜ヶ崎」地域を事例に

研究課題名（英文）Historical Research on the Lower Classes of Contemporary Urban Society: A case study of Kamagasaki, Osaka, during the High Growth Era

研究代表者
能川　泰治（Nogawa, Yasuharu）

金沢大学・歴史言語文化学系・教授

研究者番号：３０２９３９９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、聞き取り調査と文献史料の解読によって、高度経済成長期における大阪市の「釜ヶ崎」地域の歴史的形成過程を考察したものである。具体的には、当該地域に生きた人びとによって刊行された二つのローカルメディア『裸』と『労務者渡世』について、その誌面の分析と編集活動に関わった当事者からの聞き取りを通じて、どのような労働者文化が形成されたのかを解明しようとした。結果として、『裸』は文芸活動を通じて日雇労働者の更生意欲を喚起し、『労務者渡世』は生活情報提供を通じて、「労務者」としての自己肯定を呼びかけるものであることを明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This research has used interviews and historical documents to analyze the process of historical information formation in Kamagasaki, Osaka, during the High Growth Era . Specifically, the formation of historical information among the working-class culture has been examined through an analysis of two local media, “Hadaka” and “Romusha-Tosei.” This research has found that “Hadaka” motivated day laborers to rehabilitate through literary activities, while “Romusha-Tosei” spurred self-affirmation through the provision of useful lifestyle information.

研究分野：日本近現代史

キーワード：都市下層社会　高度経済成長　釜ヶ崎　裸の会　労務者渡世

１．研究開始当初の背景

日本近現代史研究の中で、都市下層社会研究は豊富な研究業績を積み上げてきた分野の一つである。しかしながら、その研究対象となっている時期は 1890 年代から 1920 年代に偏っており、戦中・戦後の都市下層社会に関する研究は蓄積が乏しい。特に戦後の「釜ヶ崎」に関する研究は皆無である。

一方、近年頻繁に刊行されるようになってきた日本史の通史のシリーズのうち、近現代史に関する巻の中には、聞き取り調査や個人が書き残した記録を通じて、いわば「名も無き」人々のライフヒストリーを発掘し、そうして得られた個々人の経験やライフヒストリーそのものを軸にして通史を描こうと試みるものがみられるようになった（例えば小学館から刊行された全集日本の歴史の第 14 巻・小松裕著『「いのち」と帝国日本』〈2009 年〉と第 15 巻・大門正克著『戦争と戦後を生きる』〈2009 年〉）。これらによって、人々の生き様を軸にして通史を再構成しようとする気運が起こりつつあるが、歴史学の研究者が日雇・野宿体験者から独自に聞き取り調査を行ない、そのライフヒストリーを現代史に位置付けるには至っていない。

本研究は、日本近現代史の研究動向に関する、以上のような批判的問題関心に立脚して着想されたものである。

２．研究の目的

本研究は、聞き取り調査の成果と文献史資料を駆使することによって、日雇労働者と野宿生活者が集住する大阪市の「釜ヶ崎」地域（以下「釜ヶ崎」と略記する）の歴史的形成過程と、「釜ヶ崎」を視野に入れた当時の社会構造を明らかにしようとするものである。さらに、以上のような研究作業に取り組むことを通じて、日本近現代史研究の未開拓領域の開拓を具体的な目標にしている。

３．研究の方法

⑴文化運動への注目

「釜ヶ崎」で暮らす人々は、日雇労働者だけではない。学生運動・労働運動に携わってきた人びとや、地域の歴史に詳しい簡易宿泊所経営者・福祉施設関係者も「釜ヶ崎」で生きる人びとである。

本研究では、上記の人々を担い手とする様々な社会運動に注目した。「釜ヶ崎」では、高度経済成長期にあたる 1960 年代から 1970 年代前半にかけて暴動が頻発するようになるが、これらの暴動が頻発する状況をあらためるべく、上記の人々と日雇労働者を担い手とする様々な社会運動が活性化する。本研究では、「釜ヶ崎」の歴史に関するこれまでの研究ではほとんど注目されることのなかった、文芸サークル活動や、日雇い労働者文化を自覚的に創造しようとする運動に注目した。

⑵文献史料の読解と聞き取り調査

具体的な事例としては、当該地域で刊行された二つのローカルメディア『裸』と『労務者渡世』について、その誌面の分析と編集活動に関わった当事者からの聞き取りを通じて、どのような労働者文化が形成されたのかを解明しようとした。

このうち『裸』は、第一次釜ヶ崎暴動発生（1961 年 8 月）直後に新設された西成警察署の防犯相談コーナーを担当する自称「三文詩人」の松原忍の提案に、大阪府労働部西成分室の職員や日雇労働者数名が賛同して結成された文芸サークル「裸の会」の機関誌である。

また『労務者渡世』は、多様な活動履歴（労働組合運動、全共闘、学園紛争、アナキズム等）を有する日雇労働者が中心となって刊行されたミニコミ誌である。

これら二つの雑誌の記事を読み込むと同時に、『労務者渡世』に関しては当時の編集作業に関わった方々に聞き取りをすることができた。

４．研究成果

⑴二つの規範文化

簡潔に表現するならば、高度経済成長期の「釜ヶ崎」では、方向性の異なる二つの規範文化が形成されつつあることを明らかにすることができた。『裸』は文芸活動を通じて日雇労働者の更生意欲を喚起し、『労務者渡世』は生活情報提供を通じて、「労務者」としての自己肯定を呼びかけるものであることを明らかにした。

ところで、戦後の釜ヶ崎とそこで生きる日雇労働者・野宿生活者に関する研究は、主として地域再生活動の関係者や地理学・社会学研究者によって取り組まれてきた。そして、釜ヶ崎の歴史と現状を一般読者に理解してもらうために、これらの研究者たちの共編著というかたちで、当時の研究水準を集大成した入門書も度々刊行されてきた。

それらの入門書で必ずふれられてきた重要論点の一つに、単身の男性日雇労働者が集住する街がどのように形成されてきたのかという問題がある。その際に必ず指摘されてきたのが、暴動発生を契機とする釜ヶ崎対策が地域の姿を大きく変えてきたという点であるが、その際に取り上げられるのは、行政による労働福祉政策や、労働運動の成果としての労働条件の改善であって、地域の中に独自の文化を根付かせようとする活動が取り上げられることはなかった。

その意味では、本研究の成果は戦後の釜ヶ崎の歴史に関する研究に貢献することができたと言えよう。

⑵更生意欲の喚起と融和的な地域社会

まず『裸』は、詩・短歌・俳句・随筆などの文芸作品を書くこと、即ち自己表現と、会員相互の共鳴し合う関係構築を介して更生意欲を喚起する規範文化の形成を目指していること、さらにその更生意欲を地域の商店・簡易宿泊所経営者や会社経営者・病院等の賛助会員が資金面でサポートする関係を構築することによって、融和的な地域社会形成を目ざすものであることを明らかにした。

また、『裸』の各号には、失業や病気のリスクに常に直面する日常生活の中で実感する不安と苦悩、そして、それを強い精神力で乗りこえたいという切実な願望を表現した詩作品が多数掲載されている。「裸の会」の活動は、ごく限られた動きとはいえ、労働者を中心とする住民の表現意欲を喚起していたのである。以上のような、日雇労働者をはじめとする「釜ヶ崎」で生きる人びとの文芸作品を多数発見することができたのも、本研究の成果であると言えよう。

⑶変革主体としての「労務者」

これに対して『労務者渡世』は、誌面を介した情報提供や読者と編集部との意見交換等のコミュニケーション活動を通じて、自らが置かれた境遇に疑問・怒り・批判意識を抱き、現在ある市民社会を批判するという意味での変革主体としての「労務者」を形成しようとしていることを明らかにした。しかしながら、読者との意見交換で浮上してきた「労務者」像には、エスニシティ（朝鮮人に対する民族差別）、ジェンダー（欲求充足の対象としてみなされる女性）などの問題が内在しており、「労務者」としての自己確認・肯定を呼びかけることと、戦後民主主義の成熟との間に矛盾が生じており、このことが『労務者渡世』編集部にとって新たな課題となることを指摘した。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　１件）

<u>能川泰治</u>「高度経済成長期の大阪・釜ヶ崎に生きた警察官の詩と随想―文芸サークル「裸の会」の活動を事例に―」『金沢大学歴史言語文化学系論集　史学・考古学篇』8 号、2016 年 3 月、pp.1－14、査読なし

〔学会発表〕（計　１件）

<u>能川泰治</u>「高度経済成長期の大阪・釜ヶ崎における労働者文化の形成―二つの雑誌『裸』と『労務者渡世』を事例に―」大阪歴史学会近代史部会、2016 年 4 月 24 日、淀川区民センター（大阪市淀川区）

〔図書〕（計　　件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計　　件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
能川泰治（NOGAWA,Yasuharu）
金沢大学・人間社会研究域歴史言語文化
学系教授
研究者番号：　30293997

(2)研究分担者
(　　)

研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)

研究者番号：